熊本大学教育実践研究　第33号，173－180，2016

不登校児童生徒の子ども理解
― ユア・フレンド事業の取り組みを通して ―

杉　原　哲　郎*

Understanding Elementary and Junior High Students with School Refusal
― An Approach to “Your Friend Project” ―

Tetsuro SUGIHARA

キーワード：不登校，ユア・フレンド，連携，子ども理解

1　はじめに

現在の不登校生徒は，全国で約12万人を超す状況にあり大きな教育課題となっている．熊本市においても，教育委員会，学校現場を中心に様々な不登校対策に取り組んでいるが，不登校児童生徒の数は，ここ数年横ばいから微増の状況にある．その対策の中で，不登校児童生徒理解という視点から取り組む「ユア・フレンド事業」がある．この事業は，不登校児童生徒を理解する取り組みとして，熊本市教育委員会と熊本大学教育学部が連携し実施している事業で，平成27年で14年目を迎える．その中で，筆者は平成26年度まで熊本市教育委員会事務局に在籍し，本事業と関わってきた．本論文は，これまでの本事業の取り組み状況をまとめるとともに不登校児童生徒の子ども理解という視点から，その現状と今後の課題について考察を行うものである．

2　不登校問題について

⑴不登校の定義

文部科学省は，「不登校とは，何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しない，あるいはしたくともできない状況にあるため，年間30日以上欠席した者のうち，病気や経済的理由による者を除いたもの」と定義している[(1)]．

⑵不登校問題について

不登校問題については，平成13年に全国不登校児童生徒数が13万9000人となり過去最高を更新した．このため，文部科学省は平成14年に「不登校問題に関する調査研究協力者会議」を設置，平成15年に「今後の不登校への対応の在り方について」という報告を取りまとめている．報告においては，「不登校に対応する上で持つべき基本的な姿勢として，不登校については，特定の子どもに特有の問題があることによって起こることではなく，どの子どもにも起こりうることとしてとらえ，関係者は，当事者への理解を深める必要があること，同時に，不登校という状況が継続すること自体は，本人の進路や社会的自立のために望ましいことではなく，その対策を検討する重要性について認識を持つ必要があること，また，不登校については，その要因・背景が多様であることから，教育上の課題としてのみとらえて対応することが困難な場合があるが，一方で，児童生徒に対して教育が果たすことができる，あるいは果たすべき役割が大きいことに着目し，学校や教育委員会関係者等が一層充実した指導や家庭への働きかけ等を行うことにより，不登校に対する取り組みの改善を図る必要がある．」という観点から提言がなされている[(2)]．

特に，不登校に対する基本的な考え方として「将来の社会的自立に向けた支援の視点」「連携ネットワークによる支援」「将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割」「働きかけることや関わりを持つことの重要性」「保護者の役割と家庭への支援」の５点を提示し，「将来の社会的自立」が重要なキーワードとなっている．

3　熊本市不登校児童生徒の実態と不登校対策

⑴不登校児童生徒の実態

図１は，熊本市の不登校児童生徒の実態である．平成22年度からの５年間で見ると，小学校は，ほぼ横ばいの状況からやや増加している．

中学校においても多少の増減はあるものの，500～600人の間で推移しているが，平成24年度より徐々に増加傾向にある．

図２，**図３**は，平成22年度から平成26年度までの

＊ 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター

不登校児童生徒数出現率の推移である．平成23年度には，熊本市中学生の不登校出現率は全国を上回ったが，それ以降，熊本市小中学校の不登校出現率は全国を下回っていた．しかし，平成26年度は熊本市小中学校とも全国の出現率を上回る状況になり，不登校児童生徒が増加していることが分かる．

また，**図４**より，不登校になるきっかけは，小中学児童生徒とも，「本人にかかる状況」が圧倒的に多く，次に「家庭」，「学校」という状況である．多くの不登校児童生徒が，自分の中に何らかの悩みや不安を抱え，心理的・情緒的な混乱により登校できないでいることが分かる．

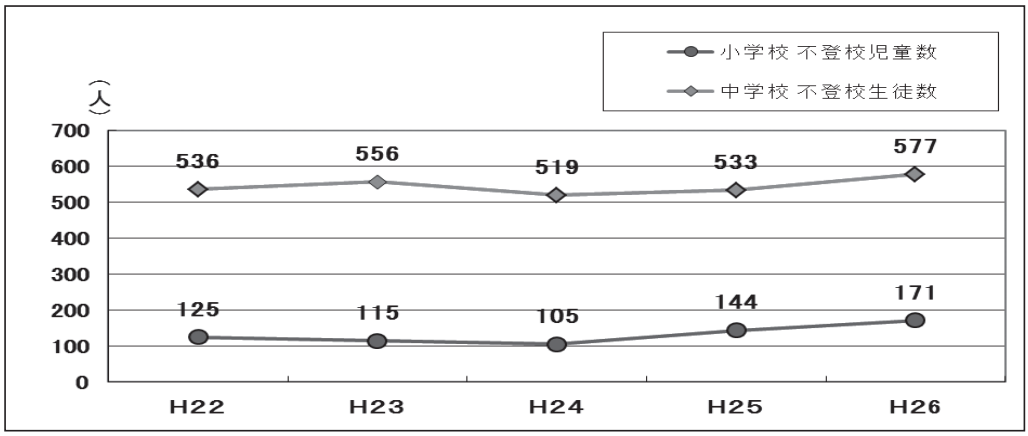


図１　熊本市における不登校児童生徒の推移

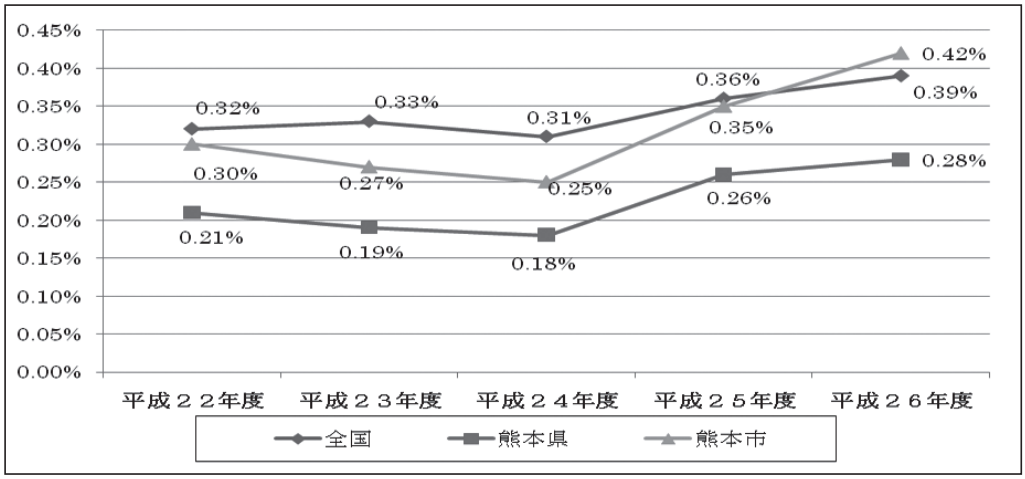


図２　過去５年間の不登校児童の推移（小学校）

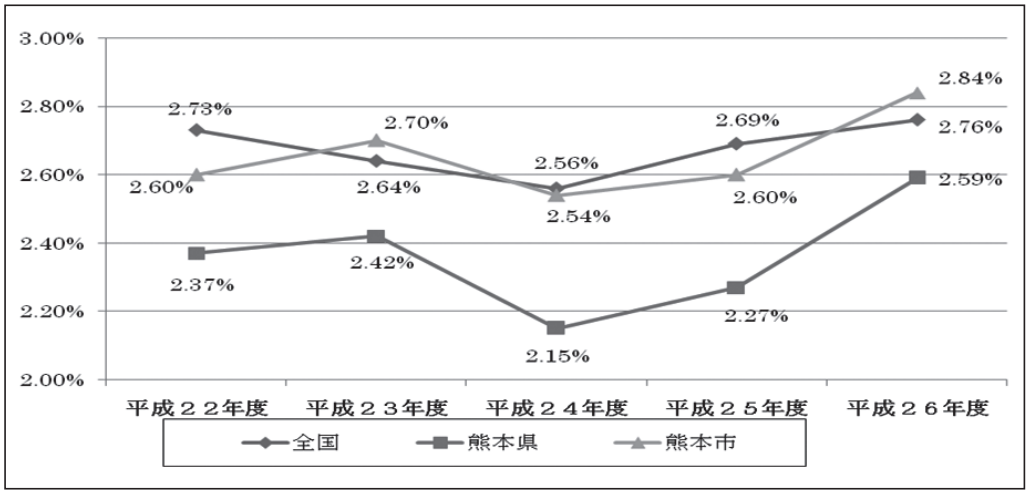
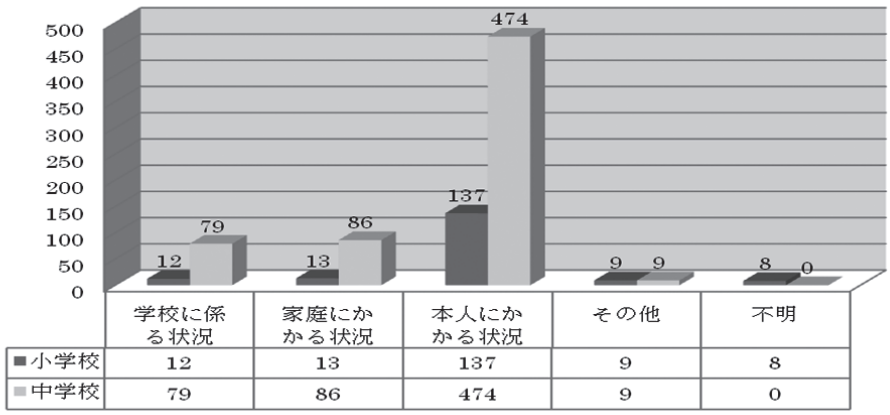


図３　過去５年間の不登校生徒の推移（中学校）



	学校に係る状況	家庭にかかる状況	本人にかかる状況	その他	不明
■小学校	12	13	137	9	8
■中学校	79	86	474	9	0

図４　不登校になったきっかけと考えられる状況

⑵熊本市の不登校対策

熊本市教育委員会は，「不登校問題は大きな教育課題」という認識のもとに，臨床心理士などの専門家を学校に配置しカウンセリングを実施するスクールカウンセラー配置事業をはじめ，精神保健福祉士などのソーシャルワークの専門家を学校，家庭に派遣し，子どもを取り巻く環境の改善を図るスクールソーシャルワーカー配置事業や，児童生徒の心の安定を図るために，その相談相手・話し相手となる心のサポート相談員配置事業，学校と連携し専門家等による相談事業を実施するなど，相談体制を整備して不登校問題の早期対応に取り組んでいる．

また，学校においても，欠席１日目は電話連絡，欠席２日目は家庭訪問，欠席３日目は担任だけでなく学校組織として対応をはじめる，「愛の１・２・３運動」を実践し，初期対応を大切にした取り組みを実施している．欠席が中長期的に継続する場合は，本人や家族の思いを受け止め，家庭訪問を継続して行うとともに，教育委員会や関係機関が連携して，専門家の相談・助言等を受けることができるよう組織的対応に取り組んでいる[(3)]．

４　ユア・フレンド事業について

⑴熊本大学と熊本市教育委員会との連携協力

熊本大学教育学部と熊本市教育委員会は，21世紀を担う子どもたちの健やかな成長を目指し，教育上の諸課題の解決及び教員の資質・能力の向上のために相互に連携・協力して，熊本市の教育の充実・発展を図るべく，平成14年２月，連携協力に関する協定を結んだ．その中で，熊本市不登校の状況を踏まえ，これまでの不登校対策事業とは異なる視点・アプローチから，熊本大学教育学部と熊本市教育委員会が連携した独自の不登校対策はできないかと何度も協議を重ねた．

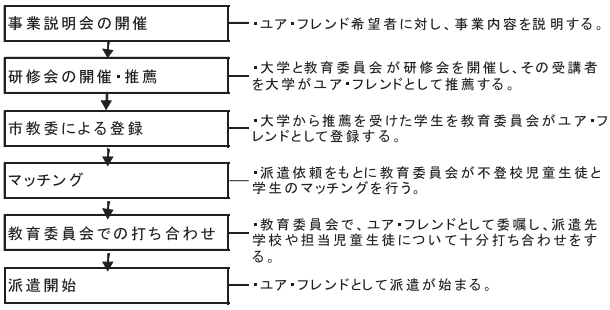
協議の結果，学校組織による学校復帰を目指すことよりも，教職をめざし，且つ不登校児童生徒に年齢の近い大学生が不登校児童生徒とふれあい，心の扉をあけていくという取り組みができないかというねらいで考案されたものが「ユア・フレンド事業」である[(4)]．

⑵本事業の目的

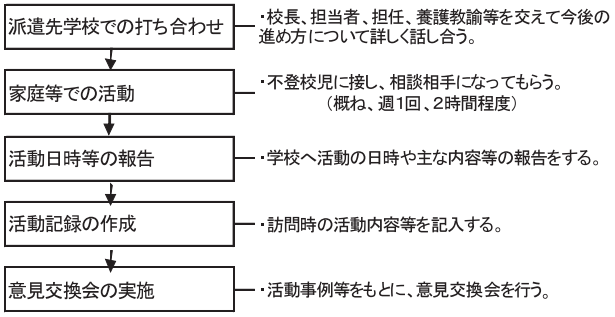
本事業は，大学（教育学部）と教育行政（教育委員会）との連携という点で全国から注目を浴びており，特筆すべきことは他の不登校対策とは大きく異なる，その「目的」にある．この事業の目的は，児童生徒と年齢の近い大学生を不登校児童生徒の学校や家庭に派遣し，大学生が話し相手・遊び相手となることで子どもたちの心の居場所などをつくることにある．つまり，ユア・フレンド事業は不登校児童生徒の学校復帰を目指したり，不登校の児童生徒数を減らしたりすることを目的とせず，不登校児童生徒の心に大学生がそっと寄り添い，話し相手・遊び相手になることを中心にした活動であり，その点が他の不登校対策事業とは大きく異なる特徴である[(5)]．

⑶本事業の内容

①ユア・フレンド事業の流れ



②ユア・フレンドとして派遣されてからの流れ



≪①と②は引用・参考文献：(6)２頁より≫

③研修等

熊本市教育委員会と熊本大学教育学部が連携して，学生をユア・フレンドとして登録・派遣・活動させるという流れの中で，４月に２年次以上の学生を対象にユア・フレンド事業説明会を実施し，目的・趣旨及び順守事項等の徹底を図るとともに，５月にはユア・フレンド研修会を開催，熊本市教育委員会が実務研修，熊本大学教育学部がカウンセリング・マインド研修を実施し，ユア・フレンド学生の資質向上に努めている．さらに，毎年度，９月と１月には，登録学生の意見交換会を実施し，活動での悩みなどについて主としてグループワーク形式による意見交換を行っている．その際，今後の活動の参考にできるよう，熊本大学教育学部担当教授と熊本市教育委員会担当指導主事が学生の悩みや相談に応じ指導・助言を行い，ユア・フレンド活動の充実を図っている[(6)(7)]．

④派遣形態と活動時の動き

≪④は引用・参考文献：(7)３頁より≫

5　ユア・フレンド事業の実際（平成26年度実績）

(1)登録学生数（年度当初）

表１　ユア・フレンド登録学生数

	大学院		大学			専攻科	別科	合計
	2年	1年	4年	3年	2年			
男子	1	0	5	13	11	0	0	30
女子	4	1	43	49	45	1	18	161
小計	5	1	48	62	56	1	18	191

平成25年度の登録学生は183人であったが平成26年度は191人となり，学生の間に本事業が浸透してきていることが分かる．しかし，女子学生より男子学生の登録が少ない傾向がある．また，登録学生191人中38人は途中辞退や未派遣の学生である[(8)]．

(2)派遣状況（改善等による派遣中止者も含む）

ユア・フレンドを派遣した学校数は，小学校32校，中学校30校の62校に上り，その派遣内訳は**表２**のとおりである．派遣した学生の延べ人数は151人であり，実数は134人となっている．男子不登校児童生徒より女子不登校児童生徒へのユア・フレンド派遣が多くなっているのは，男子中学生への家庭派遣や男子中学生との１対１の対応については男子学生が必要であり，ユア・フレンド登録学生男子が不足している現状の結果である．また毎年，熊本市教育センターで実施している「フレンドリー」という不登校児童生徒の適応指導教室へもユア・フレンド学生を派遣し，フレンドリーに通う子どもたちと１対１ではなく，多くの子どもと寄り添うような活動を行っており，平成26年度は42人のユア・フレンド学生が活動に参加した．平成26年度は，派遣回数は2336回に上り，前年の1978回を大きく上回っている．

表２　ユア・フレンド派遣内訳

派遣先		小学校			中学校			小・中学校合計		
		男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
家庭		2	19	21	21	20	41	23	39	62
学校	1対1	4	18	22	12	18	30	16	36	52
	対複数	0	11	11	2	24	26	2	35	37
合計		6	48	54	35	62	97	41	110	151

(3)平成26年度ユア・フレンド意見交換会の紹介

意見交換会で出された主な意見を「活動で得たもの」と「今後の課題」に整理したものを紹介する．

○活動で得たもの

・普通の子があるきっかけで不登校になることを実感した．

・不登校だからといって特別な接し方が必要なわけ

ではない.
・活動を重ねていくと，子どもの笑顔が増えたり，楽しみに待っていてくれるようになったりして，喜びを感じられた.
・ユア・フレンドは，学校ではカバーしきれない部分に対応できる.
・子どもと会えないのは普通のことで，会いに来た人がいることに意義がある.
・子どもの好きなことを一緒にする，自分が楽しむことで距離が縮まる.
・自分から心を開き，子どもに歩み寄っていくことが大切だと気付いた.
・子どもと一緒に同じことをして過ごすことで，お互いを知ることができる.
・先入観を持たずに子どもと接していく必要があると気付いた.
・子どもの言動に注意したくなった時は，良し悪しの評価ではなく，自分の感想として述べるとよいことがわかった.
・活動時に子どもと学校まで散歩することがあった．このことから，子どもは，学校に行くきっかけがほしかっただけなのかもしれないと考えた.
・大人にとっては小さな悩みでも，子どもにとっては大きな悩みであることがわかった．将来子ども達に寄り添う力になるだろう.

〇今後の課題
・校内派遣で，担当の子どもが登校していない時に，先生方の手伝いなどをすることがあり，ユア・フレンドの趣旨と違うと感じる.
・校内複数派遣で，担任の先生と情報交換をしたいが，子どもたちのクラス・学年が異なることもあり，直接話す機会を得るのが難しい.
・ユア・フレンドのことを知らない子どもがたくさんいる．もっと広めたい.
・校内複数派遣で，それぞれの個性が強くて対応しきれない．１人１人にした方がよいのではないか.
・先生方と連携を取ることが難しい．ユア・フレンドの目的を理解されていない先生方がいて食い違いがある.
・校内派遣の場合，保護者の方と顔を合わせることや，連絡を取ることがないため，不安を感じることがある.

⑷派遣児童生徒の改善状況

表３は，平成26年度に家庭か学校にユア・フレンドの派遣を受けた，不登校児童生徒の改善の状況である．家庭や学校への派遣を受けた児童生徒168人中，76％の128人に何らかの改善がみられている．特に，学校復帰と何らかの形で登校できるようになった子どもが37.5％もいる.

表３　派遣を受けた児童生徒の実態

何らかの改善が見られた	ほとんど学校に復帰できた	13.7 ％	23 人
	登校して教室へ入れるようになった	23.8 ％	40 人
	笑顔が出た　外出できるようになった	38.7 ％	65 人
改善が見られなかった	ほとんど変化がなかった	22.0 ％	37 人
	活動がなかった	1.8 ％	3 人

家庭派遣，校内１対１派遣，校内複数派遣と，派遣形態別にみた改善状況は以下の通りである.

＜家庭派遣＞
ア　教室に入ることができるようになり，ほとんど復帰している→７人
イ　毎日ではないが登校できるようになった（保健室，別室登校も含む）→13人
ウ　笑顔が出た，外出ができるようになった等，目に見えた変化があった→21人
エ　変化が見られない（派遣後間もないため・活動がなかったため，を含む）→20人
オ　実際の活動が来年度からのため，評価不可能→２人

＜校内１対１派遣＞
ア　教室に入ることができるようになり，ほとんど復帰している→７人
イ　毎日ではないが登校できるようになった（保健室，別室登校も含む）→27人
ウ　笑顔が出た，外出ができるようになった等，目に見えた変化があった→４人
エ　変化が見られない（派遣後間もないため・活動がなかったため，を含む）→９人
オ　実際の活動が来年度からのため，評価不可能→１人

＜校内複数派遣＞
ア　教室に入ることができるようになり，ほとんど復帰している→９人
イ　学校生活の適応に向けて，改善傾向にある→40人
ウ　変化が見られない（派遣後間もないため・活動がなかったため，を含む）→８人

６　まとめ

本事業の目的は，児童生徒と年齢の近い大学生を不登校児童生徒の学校や家庭に派遣し，大学生が話し相手・遊び相手となることで子どもたちの心の居場所などをつくることにある．つまり，ユア・フレンド事業は不登校児童生徒の学校復帰を目指したり，不登校の児童生徒数を減らしたりすることを目的と

せず，不登校児童生徒の心に大学生がそっと寄り添い，話し相手・遊び相手になるという活動である．

しかし，結果として，平成26年度，完全学校復帰に至る子どもは１割程度で少なかったが，「登校できるようにった」「目に見える変化があった」という改善傾向の子どもが全体の６割程度になっていることが分かる．これは不登校児童生徒が自分たちの心にそっと寄り添い，話を聞いたり遊んだりしてくれる人の存在を求めており，ユア・フレンドの学生がその役割を果たすことで不登校が改善したという結果につながっていると考える．

そこで，まとめとして，ユア・フレンドは不登校児童生徒をどのように理解し，どのように関わっていくことが大切なのかを考察する．

ここで，平成27年度のユア・フレンド意見交換会での代表学生の実践発表を紹介する[9]．

ユア・フレンド活動で得たもの

熊本大学教育学部　小学校教員養成課程
４年生　男子学生

私が，このユア・フレンド活動を通して得たものについてお話します．正直私は，子どもの気持ちになるということについて深く考えたことはありませんでした．これまで大学の講義や実習など，様々な場面で耳にしてきたため，ただ大事なこととして理解したつもりでいましたし，ユア・フレンド活動でも，私は子どもの気持ちになるということを意識して活動してきたつもりでした．しかしそれは，ユア・フレンドである自分から見た子どもの気持ちになっていただけで，本当の子どもの気持ちにはなれていませんでした．

私にこのようなことを学ばせてくれたのは，私が最初に担当することになった中学生の男の子でした．ここではその男の子の名前をユウキ君とします．私がこのことを学んだ経緯について，ユウキ君との活動の様子と絡めながらお話ししたいと思います．ユウキ君は私の最初の担当の子でした．ユウキ君と出会ったのは，登録した６月のことで，ユウキ君が中学２年生のときでした．はじめて会った印象としてはおとなしい子でした．私から話しかければ答えてくれますが，彼から話しかけてくれることはあまりない，そんな印象でした．正直，これから楽しく活動していけるのかと考えて，少し不安になった記憶があります．

最初の活動として，テレビゲームをすることにしました．赤い服にオーバーオールを着たヒゲのおじさんがカートに乗って爆走する某人気ゲームです．私がこのとき念頭に置いたのはユウキ君を楽しませるということです．ユア・フレンドとして，ユウキ君が活動を嫌にならないように，傷つけないように，と注意しました．ユウキ君は楽しそうにしているように見え，安心したのを覚えています．これからもうまく活動していける，そんな気がしていました．

そして，一緒にゲームをする活動を続けていたある日，私はあることに気が付きました．ユウキ君の顔が少し暗いように感じたのです．最近何かあったのだろうか，嫌なこと，気に食わないことでもあったのだろうか，と考えました．ユウキ君に聞いても何もないとしか言いません．私は不安になりました．そして，それからの活動は今までよりもさらに慎重になりました．そのような気持ちで活動を続けていき，私は，だんだんと活動に重い気持ちで行くようになってしまいました．

そんなとき，教育相談室の方の言葉を思い出しました．まずは自分が楽しむ気持ちで活動することが大事という言葉です．考えてみれば，私は自分がユア・フレンドという立場であることを意識しすぎ，楽しむことができていませんでした．こんな重いテンションの大学生と一緒に遊ぶなんて子どもにとっては拷問です．そして私は次の活動の日，自分が楽しむということを意識して活動しました．ゲームでは，いつも加減して負けていたところを，今日は少し本気を出して，大人げなく勝ってやろうと考えました．案の定，私が勝つと，ユウキ君は悔しそうにしていました．少しやり過ぎたかな，と思いましたが，次のレース，私は驚きました．ユウキ君に負けたのです．本気を出したのに．ユウキ君は今まで，自分と同様，本気を出していませんでした．私たちはお互いに手加減をしあってゲームをしていたのです．ユウキ君が最近，表情が暗かった理由が分かった気がしました．あんな接待のようなゲームをしても，楽しいはずがありません．私が子どもなら，絶対楽しくありません．私はこれまでのユウキ君の気持ちを考えると，申し訳ない気持ちになりました．それと同時にユウキ君の顔が今までよりも明るくなっているのを見て，うれしくもなりました．悔しがっている顔もなんだか明るくなったように感じました．それから，私とユウキ君はライバルになりました．

私は，自分をユア・フレンドとして，そして相手を不登校の子として，接していました．立場を難しく考えすぎ，その結果，自分も，そして相手も楽しくないような活動をしてしまっていました．子どもの気持ちになっている気でいて，結局はユ

ア・フレンドという立場としての自分のための活動をしていたように思います．しかし，現在は違います．ユウキ君と接するとき，私は，自分がユア・フレンドだということを意識しません．そして，大学生でもなければ，未来の教員の卵でもありません．ただの近所の兄ちゃんです．考え込むことと言えば，明日は何をして楽しんでやろうか．ということだけです．

この学生の実践発表の中に，ユア・フレンドとして，不登校児童生徒の子ども理解と関わり方を考えていくうえで大切な言葉が含まれていることに気づかされる．

学生は，「正直，これから楽しく活動していけるのかと考えて，少し不安になった」「私は，だんだんと活動に重い気持ちで行くようになってしまいました．」と，ユア・フレンド活動の初期段階では不登校児童生徒への関わりに不安や挫折を味わっている．

しかし，その戸惑いと挫折の経験から，「ユア・フレンドである自分から見た子どもの気持ちになっていただけで，本当の子どもの気持ちにはなれていませんでした．」「自分をユア・フレンドとして，そして相手を不登校の子として，接していました．立場を難しく考えすぎ，その結果，自分も，そして相手も楽しくないような活動をしてしまっていました．子どもの気持ちになっている気でいて，結局はユア・フレンドという立場としての自分のための活動をしていたように思います．」といったことを学んでいる．

この学生の関わりから，ユア・フレンドが理解しなければならないことは，不登校の子どもは，どの学校にでもいる普通の子どもであり特別な子どもではないということである．熊本市における不登校の実態から，不登校の児童生徒は，小学校１校平均２人程度，中学校においては１校平均14人程度存在しているのが現状である．

そこで，大人が社会から時には逃避したいと思うことがあるように，子どもたちが学校に足が向かなくなるということは誰にでも起こりうることであると理解し，不登校の子どもという意識を持つことなく，何年生の子どもたちに会いに行くといった自然な向き合い方が大切であるということである．

意見交換会の学生の声の中にも，「普通の子があるきっかけで不登校になることを実感した．」「不登校だからといって特別な接し方が必要なわけではない．」という意見があがっている．ユア・フレンドは，不登校の子どもに会いに行くのではなく，会いに行った子どもがたまたま不登校であったという意識で活動していくことが必要であると考える．

次に，この学生は，「まずは自分が楽しむ気持ちで活動することが大事」「私は，自分がユア・フレンドだということを意識しません．そして，大学生でもなければ，未来の教員の卵でもありません．ただの近所の兄ちゃんです．」「明日は何をして楽しんでやろうか．」と述べている．

学校へ行きたくても行けない，教室に入りたくても入れない，そんな不登校の子どもたちに一番必要なことは，不安を抱えているその子の気持ちに寄り添うことである．そして，自分の言葉や心の声に，構えず自然に耳を傾けてくれる人がいるという安心感から，人とかかわる，つながることの楽しさを感じ，心を開いていけるようになっていくものと考える．そのような意味から，子どもたちと年齢の近い大学生が，こうした方がいいというアドバイスや支援などにとらわれることなく，子どもたちのよき相談相手，話し相手，遊び相手になるという関わりが大切である．そして，そのために大切なことが，自分自身が子どもと一緒に楽しく話し，遊ぶという自然な関わりである．不登校を特別な存在と意識することなく，学校へ行かせようという意識を持つこともなく，「ただの兄ちゃん」として，子どもと話し，遊び，楽しんでいく活動という自然な関わりこそが，不登校の子どもたちの心を，少しずつ開いていくことにつながっていくものと考える．

しかし，本事業がさらに充実していくためには，不登校児童生徒の対応で一番苦慮している学校現場との連携が必要と考えられる．

意見交換会の中でも，話し相手，遊び相手となり自然と関わっているうちに学生に心を開き，いろいろなことを話してくれる中に，親や学校に伝えた方がいい情報だが，伝えていいのだろうかと悩む学生もいることが分かった．

ユア・フレンド学生にとっては，子どもとの信頼関係を優先したいという思いがあり，逆に学校現場としては，そこで知り得た情報や変化は共有して，不登校解消の対応に生かしていきたいと考えるのであろう．

また，意見交換会の中で，「校内派遣で，担当の子どもが登校していない時に，先生方の手伝いなどをすることがあり，ユア・フレンドの趣旨と違うと感じる．」「校内複数派遣で，担任の先生と情報交換をしたいが，子どもたちのクラス・学年が異なることもあり，直接話す機会を得るのが難しい．」「ユア・フレンドのことを知らない子どもがたくさんいる．もっと広めたい．」「校内複数派遣で，それぞれの個性が強くて対応しきれない．１人１人にした方がよ

いのではないか.」「先生方と連携を取ることが難しい．ユア・フレンドの目的を理解されていない先生方がいて食い違いがある.」といった意見も出されている.

不登校の子どもたちの学校復帰を目指したい学校と，ユア・フレンド事業の趣旨・目的から学校の対応に悩み不満をもつ学生と，お互いの立場でジレンマを感じる状況も生まれていると考える．その解消のためにも，本事業の趣旨と目的を学校と共有し，お互いの役割の中で不登校の子どもたちにかかわっていくことが求められてくると考える.

このジレンマ解消のためにも，熊本大学教育学部と熊本市教育委員会とのさらなる連携と工夫が求められる．確かにユア・フレンド事業は，登校できるようになることを目的としていないが，結果として何らかの改善がみられるという本事業の成果は明らかである.

不登校解消対策事業でなく，不登校児童生徒の子ども理解と支援事業であるユア・フレンド事業の趣旨・目的，成果と課題を大学，教育委員会，学校がしっかりと共有し，それぞれの役割をしっかりと果たし，不登校児童生徒の子ども理解を中心に据えた不登校支援事業としてこの事業が更に充実していくことを願いたい.

引用・参考文献

⑴ 文部科学省「不登校への対応について」，平成15年.

⑵ 文部科学省「不登校問題に関する調査研究協力者会議 今後の不登校への対応の在り方について（報告）」，平成15年.

⑶ 熊本市教育委員会「いじめ・不登校対策ハンドブック」，平成27年.

⑷熊本大学教育学部・熊本市教育委員会「ユア・フレンド事業10周年記念シンポジウム報告書」，平成24年.

⑸ 『教育情報2015 №7』,「クローズアップ！教育の現場『未来に輝く子どもたちのために～熊本市の不登校対策「ユア・フレンド事業」～熊本市教育委員会』」，日本文教出版，平成27年.

⑹ 熊本市教育委員会「平成27年度ユア・フレンド事業説明会資料」，２頁.

⑺ 熊本市教育委員会「ユア・フレンド学生用手引書」，３頁，６頁.

⑻ 熊本市教育委員会「平成26年度ユア・フレンド事業報告」，１～５頁．なお，本節におけるデータや意見は本報告書から引用している.

⑼ 熊本大学教育学部・熊本市教育委員会「平成27年度第１回ユア・フレンド意見交換会ユア・フレンド実践発表」，平成27年.